

川越市立図書館蔵『芙蓉楼玉屑』(中)

— 翻 刻 と 解 題 —

久 保 田 啓 一

遂件の對問

林全之問  
源鼎卿校

拙名字号之事。

姓源、名は鳳卿、字子陽、一ノ字は帰徳、号は錦江、又芙蓉道人と号。

實名國俗通り字を用候事。今の名乗を名とし、俗名の外に字を拵可申哉。名は父より命じ字は朋友より命ずる哉の事。

父祖より通字と申事不當事に候。古中華にては諱と申事の候。禮記に周人以諱事神と申て祭る時は諱を称候。國俗諱とは実名の事と心得候事、歴々儒者衆此惑有之候。又禮記に生名死諱と(25)有之候。生時は名と称し、死しては其名を諱と唱申候。然共漢時此例あるよし王弼州四部稿に見え候。當時御堂上にてや、もすれば當今御諱など御申候。日本は漢唐の法により候得ば左様の傳來にてても可有之候。先は碑文杯に死者をば名と不申諱と認候事にて候。扱諱と申事は其字をかりそめにも口上に不申候。筆にも不書事に候。孔子不諱微而諱在(26)と申事にて候。論語杞不足徵また某在斯等の事歴々證明也。尤尊者には名を嫌じ申候。乍恐古法呈様御時和哥に里人とよみ不申候。御名堂上にて御諱と御申候。識仁称し奉る故也。(25)文昭院様御

称号の節、天下文の俗名を改申候は、上近執し候事は勿論に候得共、あまり文盲なる事に候。然其人の替候に我ばかりかへ不申候事、俗に背きあしく候。世間並にいたし可然候。其訳は、常憲院様御時、徳松君被成御座候故、江戸中本やと申家名まで替申候キ。ケ様の事時の御沙汰に候へば為下如何に共不仕事に候。扱又御一字を被下候と申大禮御座候間、御名は避候而可然候。御家人は俗字不成に文書にも可認事に覚悟いたし候。今康熙字典などに玄御名と致有之候。是は康熙帝の御諱を避たるにて候。の一点を略し候。唐の比より諱の事區々に沙汰し、二ある名をも忌、音のうたがはしき名迄を諱申候。韓(26)退之諱辨御覽候え。國朝にて何の御定も無之候得ども、時々の風俗にて致候事、上を恐る、との事に候へば、此方ばかり犯候事は仕間鋪事、世上並に致宜候。然共其由来をば存申事学問する者の役に候。抑今の名乗は実名、則名にて候。日本人は字と申事なく候。是は元服の時名よりうみて付る事に候。孔子名は丘字仲尼の類、尼丘の山に折られしより二字を割たるにて候。鯉の生れ給ひし時哀公より鯉を賜はりしにより、君の賜とて鯉と御名つけ、成人して惣服なるを以伯魚と被成候。鯉魚の字を割たるなり。

今迄御付候名、家殿御付候は、其分被成可然候。字なり音などあしきとて替候事は如何なる事に候。字をば全之の名よりうみて伯備など、も御附可然候。全備(26ウ)の字を具したるなり。号の事は御望次第に付可進候。乍序申入候。尊長へは不名とて名を不書事に候。書簡並詩引にも御除可然候。姓を御書可被成候。或は号宜候。字を書候事は知己の故人同志に候。元美于鱗など相互に称し候。世貞攀龍とは無之候。和俗比病歴、儒者衆犯し候。笑止と申、失禮なる事に候。名は弟子へ申候。固也不愚、賜也達也など皆此例に候。又通字と申事も昔は故有事に候。系圖に其人の子孫としられ候様に、義家頼家義國義兼など皆通じて称せられ候。是は所分の事に付、其家を紛らはしからぬやうにとの事なり。唐様にては合ぬ事に候。今は名の一件に至りて何とも無落着事多く候。しめて唐風もいらぬ事に候。禮案下より建立は位なくして謀るべ(27ウ)からず。無用の弁に候。只其訳しり置ばかりの事に候。又人の称呼よく御吟味あるべし。学者山伏醫者などは通して先生など書可然候。かり初にも秀才詞伯賢才待宗など五山派の俗称に候。同輩ならば号足下(28ウ)下宜候。出家へは弟子坊ならば師、寺持ならば上人、戒号を上(29ウ)に置可然候。貴問に夫子と申字御書候。孔子を夫子と申事は魯の大夫故に候。日本(30ウ)の殿と申事に候。督殿頭殿、此何之書にも大夫を称して夫子と申、大夫ならぬ人には不申候。宋朝皆名称そなはず可嘆事歴(31ウ)に候。古経に夫子と記したる所可被付御心候。子路も衛の大夫になり候。夫子と可称事に候。惜乎夫子ノ説文章と云も魯の大夫故に季康子を申候。

射稽古可有哉の事。〔27ウ〕

一段可然候。先日本と夷と申事、大弓の字にて候。日本の弓は大弓に候事、武備志に日本の所にも畏れ有之候。古は武士を弓馬の家と申候。古今著聞、宇治拾遺、前九年後三年の記文等にて、古武士の弓を能射たる事明々歴々たり。保元、平治、大平記、平家の物語にもかたのごとく弓の達者なる事勝れて相聞え候。嘉禎の比より犬追物など云事あり。頼朝公より笠懸草鹿始り、いづれも主皮の射武術の最たり。日置彈正已来ひご弓の制となり、古とはかりたる事多く候。古は丸木の弓多く候。梓弓槻弓皆丸木なり。然共肥後弓は甚宜由今云へり。今の時勢なれば是亦今の弓可然候。鳥銃と云事出来しより、弓古に不及事万々に候へ共、弓取の名称に應じ騎射歩射心次(28ウ)第に候。別而輕卒役に歩射可然候。弓手の一役事濟候。其外の武器色々ありといへども武士の藝にあらず。鎗の手に大嶋流は百年已来出来候。劍術などは宮本武藏、神子上典膳、吉岡兼房などす(32ウ)み。だの仕合壘のうへの沙汰、今の武士は是を武と心得候。早竟喧嘩の種、身を亡の由に成候。戦陣に出(33ウ)ての嗜(34ウ)とは武士の役に候。居合拳法など別而近世の事、関口など祖禪開山たるべし。稽古するにも心得あるべし。弓馬は武士のせでかなはぬ事に候へども一騎の設に候。歩卒のことは其職あるべし。家々の軍法に従ふべし。只好に任せなば弓はいかにも習べしと覚え候。身も賢く、脇も強く、肩も和ぎ、腹もよくなり、氣も定り、大分養生養心ともに宜事に承り候。〔28ウ〕

軍字被成度との事。

先年も此事御申候。其節は未新知故一通申置候。此事何之為に可被成哉。不心得候。能々可申演候。心を定まへ御聞被成御工夫ある

べし。抑軍学者と申事は、小幡勘兵衛と申御旗本、寛永比甲州流の軍を御聞可被成由にて及御沙汰候。小幡勘兵衛景範、則鼎卿母方從祖也。家言猶存。今之甲州流、山鹿流（19）與異。北条安房守其傳を續候。其家来に山鹿甚五左衛門と申朱子学者有之（20）。安房守相談にて興り候。軍学の御心懸候は、先孫兵をよく御會得あるべし。七書の内の第一に候。来翁白石などの抄も有之候。そろく御覽候而根を能御合点あるべし。然ども元来詐謀を元とする事ゆへ甚人あしく成申者に候。聖人の道などは迂廻千万に成候者に候。凡軍は人をたをし己を立るが本立に候。夫も（21）戦国の時は衣冠章甫何の役に立ざるごとく、治平には曾以入用に無之事に候。一國の政を能治め候得ば、國富人足兵強馬盛に、兵器戎具皆備る故、是にましたる武備はなく候。孝弟忠義を教候は、下部みな勇士となるべし。治國平天下の道、仁義の沙汰、兵道の基本に候。大功は出儒者と昔も申候。又成ヲ学に受るとて、儒と兵、周の比込は一ツにて候。戰國比より人々分國に割據し私闘を専とせしゆへ、魏無忌兵法など申事も出来候。和軍の事、北條信玄謙信三流にて候。皆一國切の軍にて、五ヶ國七ヶ國の正裁に候。聖学宇内を馭し候軍法ほど大なる事はあるまじく候。今の傳る處彼は窺申候に、扱々人をたわげに致、自分ばかり智者になり候事にこしらへ立（22）たる事のみ候。敵々相斷の時分に左様なる事にて人もおしく候。命がけ國土がけの事に候。なかくた、みのうへの論、一ツも役に不立事に候。但軍師の役を務候得ば各別に候。さもなくば無用の事のみならず、身を亡し家を失ふ基、三代為將道家之所戒也と古来も申候。兵は凶器に候。夫を甞候て能候哉。人に急務有之候。なぐさみも能程がよく候。愚老（23）など其片端昔より

すきに承置候。目にも窺候。我等式の器量にて人の將には難成候。其器量さへ有之候得ば、智勇謀略は自然に出る事に候。山本某と申候老軍者常々語られ候。軍学ほどおもしろき事はなく候。偽はつき次第、誰か試候事もなく人尊敬すると被申候。至極の言と存候。抑軍を以國を治候よりは文を以治るには（30）しかじ。軍法者など申者、常に口を仁義に似せて武備を講ず。詞は同じきに似て心たがへり。至誠に物を動かすの道にあらず。恐ながら御當家に御軍法と申事無之にてみるべし。昔宇佐見竹園と云し軍者、大嶋江牧へ物語に、魚鱗鶴翼など人数をまとふ事五百三百の事なり。大軍に及びて魔の廻ることなし。只よき士を得る事將の第一也と云き。其説はなるべし。今軍を学ばれ候は、軍法者につかず手前にてよく兵書をよく御心得可然候。夫も多くは御無用成べし。萊翁の鈴録よき物に候。威南増（24）を本と致たる書に候。王陽明沈其義明代の名將にて候。其傳名山藏に出、一覽す。共に儒者なり。軍の上手謀の奇変云ばかりなし。前々も申候欵（31）今の軍法とは軍略なり。軍略は大將の知略也。其職にあらざれば用なし。軍法は人数の組（25）器械器兵馬の法を云也。一族の頭たる物しりて有べし。是大概なり。猶説あり。間に從て答ふべし。

君子藏徳にて曲テ禄仕するは有時のみならず且暮求の謂に候哉。

圈内解すべからず。依之答をなさず。すべて問は質直に平話にてこまくとあるべし。こはしたるはあしく候。

細夷（26）極下恵管仲のする所、皆其君を正し其民を安ず。心は一ならずや。然ルに臣の君に仕る心は一にして、何ぞ行状の潔

白不恭鄙陋いとはんや。只人の性と時と也。功不成して今後の  
誹をうくるも臣のならひにて、指て憂ひと不憂事」(31) 欽と  
の事。

是亦問の心何共不明に候。よくかなにて字まじりにつぶくど心き  
こえ候様に御書直可被遣候。御尋の事、皆心上の大事、あしく聞へ  
ば夫だけの害に候間、念を入承候。平言にてよく愚癡に聞え候様に  
御書付可被遣候。幾度も可承候。答不分明に候は、又よく可申入  
候。」(32)

### 九件の對

問に、故郷を去て身をたて学を成し、京師東都の時師に就て先  
王の道を通達せんとす。附其志利禄のためにせず道のために  
し、身を殺しても業をなし、あながち名聞によりて國人に誇る  
に非ざるとの事。

誠に大志たるべく候。志は奪べからず。然ども学者は時をしる事第  
一に候。未わかき御人に而候。世の経歴も無之、且又邊土に御生立、  
物ごとにかたづまり、や、もすれば唐風の事のみ御聞入、其癖骨髓  
に御幼少より入し、當時の國法人情皆あすかの瘡をみるやうに  
候。能年長の人の詞をも御聞、第一御両親の御意見を」(32) 何事  
にも根本に御立、自分の御存よりのま、には必被成まじく候。然共  
志は奪べからず候得ば、心のたては如何様にも御見識の通に候。父  
母在ときは遠く遊ばず、遊ぶ事方ありと有之候。先第一に身を御自  
分の物と思はれ候と存候。父母の身にて候。学者のなまなるは志々  
と申て表に出候。夫は皆我侪と申ものにて、孝の道に聊も似たる事

はなく候。吾夫子の御詞に、吾行は孝経にあり、吾志は春秋にあり  
と候。孔子家に御座候而は孝道を御行被成候。是は天下の公道にて、  
誠に誰有て咎候事はなく候。天下の治道に至りては、聖人といへ共  
時處位の三そなはずしては、綺ひ候事はならぬ事に候ゆへ志のみ  
にて候。足下などの今の御存付は志と申物にてはなく候。意思と申  
物に候。道既に得、禮樂身にある君子」(32) にて、扱志は立、誠  
の的も出来、治國天下を平にする事も掌に視ルにて有之候。今志と  
御申候は的もなく矢を放にて候。孝の事は天下の御制禁もなく、褒  
称歴もある事に候。吾夫子一世の行此道に有之と被仰候。其事は孝  
経古文嚴重に世々行はれ候。能融通可被成候。しれぬ事は幾度も  
書問あるべし。則來書先王の道にて候。仁智勇等の事書中に相見へ  
申候。仁とは天下國家治るの徳にて候。家にありて行ふ事にては小  
分の義、又心の上に就て申も中古の説に候。古書歴々證有之候。何  
事も古書ヲ以古聖人の道のかたはしを窺事のみ候。右のごとく道  
を見候ても國法ある事百有餘年一ツも禮樂世に行べき事をか、ず治  
り来り、下として擬すべき事にはなく候。たとへ豪傑倣黨の人世に  
生れ、学」(33) 問沙汰専に候共、祖宗の法今王の制、何として立  
直さるべく候哉。夫を書生の常談に古を引今を排しとや、かく申候  
事老師宿儒にも間々有之候。國體時世を諳じなく不調法なる事に候。  
愚老も十一二の比より西國にありて学問を志願に存、佐藤五郎左衛  
門弟子久水先生に就て学び候事、足下の御存寄に似より候事にて有  
之候処、江都に參、諸子に承り、自分にも種々経歴いたし、四十計  
迄も勵み存候。其後秘書の府に従事いたし、御代々御法令を窺ひ、  
國家の御定を略存候に付、右之通に候。扱世上の学者共の了簡を見

候に、あしく致候は、刑戮に陥べき所も多く、笑止千万に存候事、六十迄の功学天の寵靈と難有候。来書の中に、身を殺し戮をうけ誅謗をうけぬるとも志を遂(33)んとの事、さりとては若氣の至り客氣の所為と申ものと存候。百年計已前には左様の学者もま、有之、名をなしたるも御座候。夫は学問未開けず、諸侯より已下只結構成事と覚えて居られ候ゆへ、世も質実なる時ゆへの事に候。江戸京師共に今程は大に交じたる事に候。己究竟あほう者と申に成、志とげず先祖を恥しめ、何のやうにも立ぬ事に成申候。学問とは元来父母君臣長幼夫婦の道を順にいたし、身の無事に首領を保ち、父母に難をかけず、父母の心を安置するこそ最第一の行にて候を、左様の任俠情強き本性にては親愛和氣愉色一ツもあるまじく候へば、其元朝夕御侍養不順に而は無之候哉と被存候。存寄申進候様にと御申越に付申入候。(34)

二問に曰、経学に志し俗にそむかず、己のいましめを第一とし、詩文等の空に馳ル事はやめ、五経語孟史学等被成度事。又学問の綱領を得て小目は措き諸藝等は不及事。并今の学者元をうすく末に走り、古人の言を身に引付けて用ゆる等の見識の事。

大抵よろしきにて候。然共是を見識と御立候は、違可申候。先、見とは物を見あらはしたる事に候。書も融し、萬の義も得道したる上に道を見あらはしたる事に候。見賢遍反に候。みあらはすと云事に候。識とは了解の義と申て、氷はつめた火はあつき等解候としる事に候。然ば見識二ツにて共に修行つみたる上の事に候。未ダ学問の事御経曆もなく候内に見識如此御立候由(34)先にも書付候通、的もなき矢に而候。博学而約問と御座候。しらぬ事を先をく、

り候はずや。ひようととはづれ可申候。先、物を学ぶべきは如何様にして学ぶべきと智者に御問、其上にてさしづをうけ、其通にいたし、一通つとめ、又よき了解も出来せばまた其事をうけ給はり、よしあしをわかち、扱従ふべきはしたがひ、従まじきはしたがはぬもよく候。是弟子の義に候。孔子右の手を上を被成候時、門人左の通いたし候へば、姉の喪あるゆへ如此被成候に、二三子扱々字を好む事かなと仰候事、禮記に有候。昔は師を取て如此学びたる事に候。礼楽専らなるゆへに候。今こそ亡びて学者何を学び候事に候哉。只書物をよむ計に候。書を讀事はさして師を取にも不及事に候。しれぬ事を問迄に候。注脚の物種々(35)有之、字書種々有之、考書種々有之候へば、先に書候三根さへ候へば成し候。讀書の上の師匠は何の書を見可申、是は何の書を引合せてすまし可申、是は何と申語意にて候と申事計を師に承事に候。是皆此方見識ある顔少も有之候而は不出来事に候。我等も今にいまだ見識はたて不申候。道にかぎりなく学にうへなき故に候。され共経歴六十年致来り候ゆへ、少く先ノ道行見え候様に而候。夫も見識とは有道の上ならでは難申候事故、人にも其ごとく申事に候。経学と申候に二色有之候。今の経学とは義理穿鑿のみにて、いわゆる空論に候。古に経術の士と申は制度の事に候。古道は制度文章に残り候。是皆國家經濟の事にて候。寔に大業に而候得共、唐山に而は入事にてあきつすの道にはさ、はり候。(35)只古聖人制作の意、道のすがた如此と申事を窺置極置、他日國君御用にも候は、談じ可申料に候。又義理詮義に候は、博学ならでも経学と申は成就すべく候。四書近思(36)録にてすむ事に候。宋人も五経へ入たるはすくなく候。詩書の解共大に古義を失候。春

秋もしかり。易など殊外骨折吟味候へ共、一得一失不少候。理より推候へば何事も左様成様に見ゆる物にて候へ共、古に徴して相違にてやうやく鐘の緒に取付、だん／＼と奥の院へ参り、佛を礼拝仕るやうに成候事、皆諸君子達の恵に候。夫故我等は誰の見は如此、誰の解は如此、何の道は如此といたし、此方貪着不申候。其解別に有之候。御聞被成度候は、追而みせ」(36才)可申候。道は費にして隠とて廣くしてつゝまり有之物、一方計を申てしれぬ事に候。段々御功学のうへ相しれ可申候。

第三問、是は大事の義に候間、別對いたし候。

第四問、詩学あるべきよし、然共今の詩は古詩にあらず、閑雅のごとく楽淫悲怨の義なし。俗の耳目を悦しめ、唐已来の聲調のみを費て学者の急務にあらず。只奇巧を事とす。われ此中に陥らん事を恐れ。若学ばゞ毛詩により、字格にも拘はらず暇あらばこれに従はんと云事。

第五問、文章を学ばんとす。古文辞を事とすべし。但文章述作には心なし。只古を愛する故是を信ずると云事」(36才)

第六問、礼楽制作の事。

第七問、史学すべき哉の事。

第八問、和歌に志すべきや、日本の教なればと云事。

已上五件、悉く学ばんとにはあらず、承置度との事。

詩学も学問に益ある事に候。古今来書籍韻語半に及候。然共来意甚御不通の事にして、一朝には合点は参まじく候旨、経生の言談のみ御聞候故、先入の物主と成て学問進むべからずと存候。先唐詩を

毛詩と雲泥と思はれ候事、形計をみて心をしらぬ人の言事に候。少々可書付候。合点の参候事にて可申候。大和歌は日本紀に始り候。夫今萬葉古風の躰、中々今日の情態とかはり候得共、ならのはのむかし今廿一代の勅撰并今日の堂上の和歌、皆一派の事に候。然共風躰も世々変じ、」(37才)詞に古今あり。今の昔にあらざるがごとし。依之深く考へざる輩、古風よろしなど云て萬葉風など申事をいふが御入候。更に立入なき人のする事にて候。風躰詞の世に隨て変ずる事は、夏の葛冬の裘にてわがしりたる事にはなく、皆時世天造のうへになれる事に候。されば風雅の二つはいづれにも無隔候。人心に二色なければ也。詩の教も始は夫婦男女に興り、毛詩より漢魏六朝唐まで詞氣體裁はかはり候へ共、心は一貫に候。夫より変じて又変じ、明人其竅を伺て古にかへし候。然共聲をうしなひたる事は宋よりに而候。楽音絶し故に候。是は何としても禮樂古にかへる形なく候故、唐人も日本人も手の不及事也。但明人文字より見披き、字遣ひ體裁にて古人を相手にいたし、古詩に光を争ひ、其一(37才)體詩經の體も有之候。古韻の遺様も有之、詩經の體の古詩もならぬ事にてはなく候。然に來書に字格にも拘はらず古詩のごとく作れしと有之事、豈而御存知なき事に候。古詩は古詩の字格韻ありて、中々今の詩を作り候よりは大難に候。氣象風雅一点の卑劣有之てもならぬ事に候。今の理学者などの萬事理窟強き口氣にては下品千万、風雅一点も無之事故、存もよらずならぬ事に候。但和歌は昔より聲律なく候ゆへ、似せ候事安く候得共、古詩は聲調中々難及候。詩經躰よりならぬ物は漢の古詩にて候。夫より已下六朝晋の古詩は事により出来候へ共、一足ふみちがへ候得ば唐の古詩と成候。宋人の古詩

は在郷者の歌を諷ふ様成事に候。下輩の至風(38オ) 雅を失ひたるにて座敷へ出されず候。然ば詩作等も学様に学問に成候。殊に文章など書習ひ候には文字の色つや出来候事有之、今古の変を存候。人情物態にも通じ候。中々容易に詩もならぬ物に候。扱又日本にては和歌にてもよみ候へば風雅の楽み有之候。人心は和悦するを以テのび候。学者と申候物は氣づまり成物に候。浄瑠璃も語られず、三味線もひかれず、鄂曲今様は絶候。平家もおもしろからず。婦人女子よりはじめて慰むべき事なく、鬱滞して煩多く候。熊沢先生、集義外書御書に其事よく申おかれ候。日本楽に通じたる人ゆへに候。二書も御覽候得かし。次而に申候。扱詩経の事も蔡沈の注に而は通ぜず、勸善懲悪など申事もさやうばかりにてはなく候間、能(38ウ) 古義を御尋、詩経をも御よみ候へかし。

文章の事、随分御精出し御修行あり度候。古音を愛すと申事は何の事に候哉。文章音はなく候。韵語の類は其通に候。離騷の躰、賦賛銘箴尤韵有之候。散文本に而候。記事第一に候。論牀は成安き物に候。然共理窟過ぬやうに御書習可有之候。惣じて理窟と申物、学問の大害、人事の礙に而候。能、御工夫あるべし。

一礼楽の沙汰、中々不及事に候。但学者其文を考候は役に而候。是は天子の被成候事に候。禮とは世々の國法の事に候。楽は今も日本に有之候。しかも唐にうしなひたる聲、我國に残り候。扱々珍重成事に候へ共、是亦何の諷物と云事しれず。啞楽なる事千載の恨に候。(39オ)

一史学之事、御出精あるべし。不及申候。  
一和歌の事、詩文等御学び候は、御無用に候。詩文は唐山の事に候。

歌は日本の事故、和氣詩文に一点も有之ては日本人の詩文にて候。又和歌も唐風のまじりたるはにくきものに候。夫を両方ながら得候事は、心の轉換を自在にして、和歌は日本の和ギたる氣象よりよみ、詩は唐人の氣象を自由し、古詩は漢魏の氣象学問を手に入、文も又さのごとく世を以書まいづれに少づ、片付、合点ゆきたる時よの事をいたし候が、我等共も師承せし趣に候。(39ウ)

孝悌忠信對問

藤保由問

問に曰、孝悌忠信、我黨の人着実に行べき事如何意得侍らんや。對て曰、孝弟は家にありての行也。忠信は人と交るの道也。分ちて云時は、孝は善父母に事をいひ善とは善を尽して可、善兄長に事をを悌とす兄はこのかみ、長は。忠は己が心をつくして心の及ぶかぎりをいたす事にして、信は言の偽りなきをいへり。凡如此の誥訓は書をよむ人皆しれる所にして、足下も心得給はん事はしるといへ共、問に對する事は両端を叩て竭さざれば、いはゆる忠信を欠にて候ま、無用の贅語多辨に涉り候。抑聖人の教浩漠無際にして、人により時に應じ、邇が遠く卑が高し。变化玄妙なれば人のなりがたき(40オ) 事はしる給はず、只平々たる典常のみ。たとへば其不可思議なるに至ては、海を硯にすとも濱の真砂のかき尽しがたく、林を筆になすとも猶ことのはたらかずこそ覚え侍れ。此對問の事、ゆめ身に行えて心にしれると申にはあらず。ひとへに七十にちかき老の僻言むかしより聞けるあらまし耳にとゞまれるかたはしを書のべ侍るにこそ。凡道とはなべての事をすべく、りあまさず洩さぬ所の名にして、此名すでに立時は、天の道地の道人の道諸の道にわかち名付たる事

也。孝弟忠信の名も是より立て教の名とせられし事、世々の聖人心力を尽し、制作をはじめ、人の道をたて、天下を治め、萬世の法とし給ひしより、其事皆方策にとまりぬ。仲尼世に出給ひ、上堯舜を祖術(40ウ)し、文武を顯章し、仁道を専らに述給ふ。論語家語三傳周易礼記等に涉獵して其詳なる事を心得べし。中にも孝経は至徳要道ときをかせ給ひて、かみなる下の人身をたて道を行ふ事に專にのべ給ふ。されば一孝立て萬善なることも聞え、天を載き地をふむ人父母なきはなし。一孝をもて天下を和順し萬民を惇睦する事を述べられ候へば、孝経をよみて孝道を心得べし。悌は孝より生じ、忠も信もおのづからこれよりなりいづる也。是亦学問要道、漢には孝廉をもて士を擧、孝経を学官に立られしも、古にちかき世の教とする所をしるべし。梁の国子司業皇侃は普門品に代てこれを口誦し、しかと御得心候て孝経を熟讀あり。聖人教の基本を吟味あるべし。餘力も候はゞ(41オ) 經史諸子百家をも博く御覽候て智を開き、行を勵キ、御用に御立候様におもはれ候はん事本に候。君子の道は費にしてひろき隱くゞる事、夫婦の細事より方をきはめて一貫に候。去により仁と説、忠恕と説、孝と説、色の千種ちかに徳義の名相別たる事、草木の區あるがごとくに候。只是一生いの草くさより養立るごとく也。されば老莊佛墨子荀子等の趣をもさゞく伺はざれば道の融和はあるまじく候。凡書をよむ、稍もすれば一偏に落て固陋の煩世に多く候。家を治るにも人に交るに一經一道にかたより候は、博文約禮の教にたがひ候。礼楽をもて上世には人情を和融し候へども、今其事絶たるがごとくに候。此國にても和歌音楽などや、其なごりなるべし。抑吳國の風教吾日の本に(41ウ)かなひがたき事もこゝらなる

べし。第一には國制を能く浹洽して士は士の脩むべき事、今の世に生れての先務なるべし。御法令の第一條に、文武忠孝をはげまし、人倫を明らかにし、礼儀を正すべきよし御定めなり。学問當時に用なしなど利口するの輩あり。無下に法をなみする事をしらず。悲むべし。亦殆哉とぞ覚ゆ。幼年の人に必文字をよましめて、長じて学問に入べき基を立る事しかるべし。是を築作にたとふ。百の色目も皆下ぞめありてこそ顔色はうるはしけれ。教は急迫にあるべからず。月をかさね日をつみ、おのづから潤澤周遍ならしむ。学問のみにあらず。政事家事萬の事、一とせのめぐるがごとくあるべし。不知不識して(42オ) 善地に到る、是聖人の神道、教を設るいはれ也。偕亦孝弟忠信とならべたる事、往古には聞えず。孟子よりはじめていへる歎。初篇に壯者以暇日修孝弟忠信とも、尽心に安富尊榮に對して四字を出せり。此四字はいづれも子弟たる者の教也。孔門には多孝弟とのみ出、或忠信とのみ出たり。孝弟一類忠信一類、論語皆しかり。併みるべし。あなかしこ。

寶曆五七月下旬

源鼎卿謹寫(42ウ)

宋諸老先生五常説

鳴鳳卿述

濂溪周子の曰、四徳の元は猶五常の仁のごとしと。是仁義禮智信を以五常とす。四徳とは易乾卦爻の辭、乾は元亨利貞といへる義にして、元は大なるの義、亨は通ずるの義、利は宜の義、貞は正しきの義也。天に四季四行あり。人に四性あり。則四徳也。春夏秋冬木火金水を仁義禮智に配す。信をいはざるは、五常の信は五行の土のごとしとて、天の四行土に質をそなへ、其氣上にめぐる。四季に土用



あり。各其季に寄王する事十八日なるがごとし。凡天地の間は一氣の流行のみ。一氣動靜し陰と成陽と成、陰陽二氣交感の理にも、ことなし。陽は健にして陰は順也。五行の内火木は陽にして健、金水土は「(43)」陰にして順也。天地の始水火先なれり。二物則陰陽の凝れる所、健順の性あり。五常も仁義を以言時は、仁は陽にして發生を主り健なり。義収斂を事として陰にして順也。因て陰陽五行に配して性中に仁義禮智をそなへ、健順五常の義とす。又五常を陰陽に分配する時は、仁禮は陽、義智信は陰に屬す。是人は萬物の靈長にして天地と徳を合せたるいはれなり。朱子大學の序にも天生民を降してより則是に與るに仁義禮智を以せずといふなしとは此義也。されば人々性中に具れる所萬古に亘りて不易なる理をもてこれを五常とはいふ義也。又全言の仁偏言の仁といふは、天の四徳元の内にこもれるに比」(43ウ)す。春は生じ、夏は長じ、秋はみのり、冬は藏す。生長収藏皆春の生ずる所也。五常の仁も此形なり。是を全言とす。仁にして四徳をかぬれば也。ならべ称するは偏言にして五行となれるを云義なり。

右五常總説

仁

朱子曰、心之徳愛之理と。先心とは人の一身の主人にして、上下八方此心より使令する所、此心天にありては命とし、物にありては理とし、人にありては性とし、人身に主たる所を以心と云也。此心を殺の種にたとへて其生ずる所の理ある、是を仁と云。いはゆる徳

なり。既に生ずる時は情と云。扱愛の理とは、愛は「(44)」七情の一にして物を受ずるの道理ある所也。此仁は、心の全徳生みの道理天より人にうけ具へ、己が身に固より得る所を以心の徳とす。是則仁の體なり。物を慈愛するの道理あるは其用也。是愛の理なり。萬の事に體用あり。影と形と相離れざるが如し。されば仁は天地生物の心ともありて廣大なるもの也。其理にしたがひて親を親とし、人を恵み、物をあはれむいはれなり。孟子に惻隱の心は仁の端也との給ふ。其かたはし心に頭れて物を慈愛する姿と成ものなり。

義

朱子曰、心之制事之宜と。是又體用あり。制とはおさふると云事なり。人心に天理と人慾の兩行あり。天理に順じて己が私を押ふるは義を行也。人欲にしたがふは「(44ウ)」不義にして人道にあらず。されば天理自然に人心を制するの理あるを心の制とす。體也。萬の事宜とよろしからざるとあり。事わざ皆宜にしたがふ。いはゆる事の宜也。よつて仁義と並称する時も仁は體にして義をば用とす。如何に仁愛すればとて、我が親人の親の差等もなく、受まじき物を受、すまじき事をなすは、義なき也。仁義ならべ称するも是が為也。孟子に羞惡の心は義の端也との給ひ、はぢなき事を我心にもはぢいむの心義のかたはしなりと也。

禮

朱子曰、天理節文人事儀則と。天の道理のほどよきあやあるとて、日月五星昼夜をわかち、四季折／＼の花紅葉に至まで皆天理文章あり。禮の體となり」(45)ぬ。人に尊卑高下あり。威儀三千のおほき人の手本なるもの人事儀則にして用也。孟子曰、辯讓の心は禮の

端也。人に尊退し人に讓るは禮のかたはし心に頭はる、もの也。

智

智信の二徳朱子鮮なし。

周子曰、通曰智と。物に通融して是非善悪の差別明らかに、物を始めて開き、務を成就し、人を利し、己をおくもの智の徳なり。孟子曰、是非の心は智の端也。

信

周子曰、守曰信と。凡事を操守りて道をたがへざるは信也。先に出たる四行も此信にて拘束す。此信な(45)き時は偽なり。人言を信とすと云て、人は詞をたがへざるを信といふ。

右性にそなはれる所五常の大略也。又親義別叙信をも五常と云事あり。父子君臣夫婦長幼朋友の常の道なり。孟子に見えたり。

性理の学大綱

聖人既に没し給ひ、其教変化し、曰天端の教、老子の恬憺虚無、釋氏の教寂滅是性の類、刑名法律の学、権謀術数の事盛にして、生民の耳目をぬり、聖人の教隱晦せるを以、宋の周茂叔はじめて太極の圖説をのべ、道の本源天に出る事をしめし給ふ。是は易係辭に、易に太極あり。陰陽兩儀を(46)生じ、兩儀大陽少陰大陰少陽の四象を生じ、四象乾兌離震巽坎艮坤の八卦を生じ、八を疊て六十四卦を生じ、陽数極りぬ。陰の数ハ六則重卦の六爻是也。六六三百六十に積て爻の義終る。萬物生々して無息の象を據とせり。太極は元來極りなき物也。寂然として動かす。万の象其内に存在す。動けば陽となり、しづまれば陰となり、其動靜によりて其氣妙合して水火木金土となり、天地となる。天地の性情を乾坤とす。乾は健なる氣に

して男となり、坤は柔順の氣にして女となれり。如此人道出きて萬物それくになり出る、所謂一陰一陽是を道とす。是天地本原のすがた也。因而道跡と云。

理とは則太極也。氣とは陰陽なり。陰陽をはなれて(46)太極有にあらす。太極は陰陽の中に寓す。理氣二なし。然其氣は清濁あり。理に清濁なし。渾然たる物なり。理は先にして氣は後と云にあらす。理といへば氣、則是を包む。一といへば二を含がごとし。されば二を倍するは四、四を重ねるは八、數も亦如此なり行所、理のしかるいはれなり。此理は萬物に有物也。天にあれば命とす。命を司る所あるがごとく、主宰する所を帝と云、人にうけては性とし、己が身に有を心とす。此心のうごきて物に感を情と云、獨動を意とす。思惟するを思と云、計量するを慮と云、聊尔にせぬを慎とし、事を大切にし無事時はみだりなき様に畏る、を敬とす。眞實にして妄なきを誠とす。如此心の上においても理は一理にして應接の間に各あり。程子曰、物在を理とし、物をはかるを義とす。理一にして分殊也(47)共あり。物々に此理を寓す。窮理の学爰になれり。窮理又格物致知ともいふ。抑世遠く聖亡び、禮樂仁義の教諸家の説出て、有がごとく無がごとし。河南一程子學を濂溪周茂叔にうけ、禮記の内に大學中庸あるを見出給ひ、論語に孟子をそへ、學庸を合せて四子の学とし給ふ。大学に三綱領八條目あるを以入学の門をたつ。格物とは事に到ると云意、凡一事一物のうへに到るを云。致知は其事物に到りて其當に然るべきの理を窮るなり。たとへば字を書るがごとし。此字に何の義あり、何の理なりと極めしる類也。今日一事に至り、明日一物に至り、日をつみ年を重ねて怠らざる時は衆理一

申して萬方潤達す。一旦豁然として心明らかなる也。扱誠意と云よ  
り平天下まで此窮理の力にて至る也。是を明德を明らかにすとし、  
是を推し」(47ウ)て民の徳をも新にし、至善の地に止りて動事なき  
は聖人の地位也。學成就の事也。

以上道體

氣質性本然性

人は陰陽五行の氣を受けて生ず。其氣の清を受たる人は、才も自然に  
すみて世に所謂器用にして伶俐發明也。道にす、む事はやし。其濁  
氣を受たるは、自遲鈍にして道にす、む事人に後る。然共其勤めて  
怠らざれば其積り伶俐發明と功を同じくす。人一たびにしてよくす、  
われ是を十度すと中庸にいへるがごとく、其終は相ともに一に歸す  
る者也。只氣稟とて氣質の受る所にしてかはり有のみなり。たとへ  
ば怒氣強き生質あり。嗜慾深き稟あり。洒落なる風儀あり。燥(マヤ)  
る性あり。靜なる」(48ウ)生あり。柔弱なる人あり。剛生なる者あり。  
皆天氣の變化をうけて萬品の質をなす。是氣質の性なり。人欲此に  
出。

本然の性とは先に云所の天命して人に受る所の性なり。天の性は不  
善なし。皆善なる者にして二なし。賢愚鋭鈍皆同じく天より賦與す  
るの理にして、人うけて性とする物也。聖凡かはりめなし。たとへ  
ば氣質清濁に受て不具なり共、自弃自暴せず己が私によく克おほす  
る時は、愚も智となるべし。不肖も賢となるべし。つとめに有故也。  
是学問の功なり。聖愚本来差別なき道理、本然の性也。天理此に出。  
五常の解、既に別見す。

忠恕

— (48ウ)

注

- (7) 本文「蒙」——「其」(朱)
- (8) 本文「左」——「在」(朱)
- (9) 本文「か」——「侯」(朱)
- (10) 本文「も」——「共」(朱)
- (11) 本文「衛」——「術」(墨)
- (12) 本文「稽」——墨で抹消し行間に「藝」(墨)と補記。
- (13) 本文「おろ」——行間に「出」(墨)と補記。
- (14) 本文「稽」——行間に「嗜」(墨)と補記。
- (15) 本文この部分なし——頭欄に注記(朱)。
- (16) 本文「阿」——「安」(朱)
- (17) 本文「阿」——「安」(朱)
- (18) 本文「功」——「切」(朱)
- (19) 本文「そ」——「亡」(朱)
- (20) 本文「老」の字なし——行間に「老」(朱)と補記。
- (21) 本文「翌」——「翼」(朱)
- (22) 本文「問」——「問」(朱)
- (23) 本文「筆」——「草」(墨)
- (24) 本文「姓」に近き字体——「性」(朱)
- (25) 本文「仁義禮智信」——「信」の字に朱点を付し、欄外に「信之字衍乎」(朱)と注する。
- (26) 本文「信」——「倍」(朱)